



宮田満雄 教授

## 宮田満雄教授略歴・主要業績

## — 略 歴 —

## 学 歴

- 1949年4月～1952年3月 関西学院高等部卒業  
 1952年4月～1956年3月 関西学院大学文学部英文科卒業  
 1960年7月～1962年3月 北米ペンシルヴェニア大学大学院（留学）

## 職 歴

- 1956年4月～1966年3月 関西学院高等部教諭  
 1966年4月～1968年3月 甲南女子大学文学部専任講師（英語・米文学）  
 1968年4月～1970年3月 関西学院大学社会学部専任講師  
 1970年4月～1976年3月 関西学院大学社会学部助教授  
 1974年11月～1974年12月 関西学院大学学長付  
 1974年12月～1975年4月 関西学院大学学生副部長  
 1976年4月～1999年3月 関西学院大学社会学部教授  
 1984年4月～1989年3月 関西学院大学学生部長  
 1989年4月～1998年3月 学校法人関西学院院長  
 1999年4月～現在 関西学院大学名誉教授  
 1999年4月～現在 学校法人聖和大学学長

## — 学会および社会における活動 —

- 日本英文学会会員  
 日本米文学会会員  
 日本アメリカ学会会員  
 関西学院大学英米文学会会員  
 日本ヘミングウェイ協会会員  
 1966年4月～1977年6月 神戸 YMCA 理事  
 1976年6月～1980年6月 日本 YMCA 同盟国際協力委員会委員長  
 1977年6月～1988年7月 神戸 YMCA 副理事長  
 1978年7月～1982年6月 世界 YMCA 同盟難民・復興委員会委員  
 1979年7月～1980年6月 世界 YMCA 同盟創設125周年記念特別委員会委員  
 1979年6月～1984年6月 日本 YMCA 同盟常務委員会委員  
 1980年6月～1982年6月 日本 YMCA 同盟国際協力委員会委員  
 1980年6月～1984年6月 日本 YMCA 同盟副委員長  
 1980年6月～1981年6月 世界 YMCA 同盟役員推薦委員会委員  
 1981年7月～1985年6月 世界 YMCA 同盟常務委員会委員  
 1983年6月～1986年6月 日本 YMCA 同盟国際協力事業顧問委員会委員

- 1988年7月～現在 神戸YMCA 理事長  
 1989年4月～1998年3月 学校法人関西学院理事  
 1989年4月～1999年3月 学校法人関西学院評議員  
 1989年4月～1994年5月 キリスト教学学校教育同盟常任理事  
 1990年4月～1998年9月 国立民族学博物館評議員  
 1994年5月～1998年6月 キリスト教学学校教育同盟理事  
 1995年3月～現在 学校法人聖和大学理事  
 1997年3月～1998年3月 アジアキリスト教大学協会(略称ACUCA)会長  
 1997年5月～1998年6月 キリスト教学学校教育同盟常任理事

賞 罰

- 1993年8月 Distinguished Achievement Award 受賞(アメリカ デイラード大学)  
 1995年5月 兵庫県功労者(青少年功労)表彰  
 1996年5月 マウント・アリソン大学(カナダ)から名誉法学博士(LL. D.)を受領  
 1998年11月 社団法人 青少年育成国民会議表彰

— 論 文 —

- |  |   |       |
|--|---|-------|
| ヘミングウェイにおけるニヒリズムの実態                              | 関西学院高等部論叢第3号<br>関西学院高等部                           | 1959年 |
| Ernest Hemingway と自然                             | 甲南女子大学研究紀要第3号<br>甲南女子大学                           | 1966年 |
| The Dangerous Summer における晩年の Hemingway           | 甲南女子大学英文学研究第3号<br>甲南女子大学                          | 1966年 |
| Hemingway における太陽についての一考察                         | 甲南女子大学研究紀要第4号<br>甲南女子大学                           | 1967年 |
| D. H. Lawrence と Spanish America                 | 社会学部紀要第18号<br>関西学院大学社会学部                          | 1969年 |
| Ernest Hemingway と宗教                             | 社会学部紀要第21号<br>関西学院大学社会学部                          | 1970年 |
| Ernest Hemingway における Old Heroes                 | 社会学部紀要第22号<br>関西学院大学社会学部                          | 1971年 |
| Anselmo as a Tutor : A Study on Ernest Hemingway | 英米文学第16巻第1号<br>関西学院大英米文学会                         | 1971年 |
| Ernest Hemingway と家庭環境<br>—失地回復を求めて—             | 社会学部紀要第26号<br>関西学院大学社会学部                          | 1973年 |
| Ernest Hemingway の自殺をめぐる                         | 社会学部紀要第30号<br>関西学院大学社会学部                          | 1975年 |
| 1930年代における Ernest Hemingway                      | 社会学部紀要第34号<br>関西学院大学社会学部                          | 1977年 |
| W. R. ランバス先生の書簡集について                             | キリスト教主義教育年報 No 7<br>関西学院キリスト教主義教育研究室              | 1979年 |
| ウォルター・R・ランバス書簡集 (翻訳)                             | W. R. ランバス(資料関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ)<br>関西学院キリスト教主義教育研究室 | 1980年 |

- |  |   |       |
|--|---|-------|
| ジョイス・キャロル・オーツの一考察<br>—北の門のかたわらでを中心として— | 女生と英米文学<br>研究社                                      | 1980年 |
| ランバス資料邦訳について<br>—朝鮮関係資料について—           | キリスト教主義教育年報 No117<br>関西学院キリスト教主義教育研究室               | 1983年 |
| 朝鮮雑記 (翻訳)                              | W. R. ランバス資料 (関西学院キリスト教教育史資料V)<br>関西学院キリスト教主義教育研究室  | 1984年 |
| H. D. Hart のランバス研究                     | キリスト教主義教育年報 No11<br>関西学院キリスト教主義教育研究室                | 1984年 |
| W. R. ランバス 宣教師としての<br>生涯と事業 (翻訳)       | W. R. ランバス資料 (関西学院キリスト教教育史資料VI)<br>関西学院キリスト教主義教育研究室 | 1985年 |

## 宮田満雄教授記念号によせて

社会学部長 高坂健次

「彼 [=アーネスト・ヘミングウェイ] の作品は、ストーリーが面白いばかりでなく、人生論的にも意義深いものをもっています。また、冗漫にはしらない明解な彼の文体も、散文としては新しい形であり、英語を学ぶ者にとっては非常に参考になります。彼自身の生涯も激しいものであり、彼の生き方自体が研究する者に人生に関する多くの示唆を与えます。」(『大学案内』に記された宮田先生のメッセージより)

宮田満雄先生は、アメリカ文学、特に20世紀の小説を専攻されましたが、なかでも「ヘミングウェイの作品と彼の生涯について関心をもって」おられました。先生は、波乱に富んだヘミングウェイの人生のどこからどのような示唆を受けられたのでしょうか。戦争、暴力、狩猟、拳闘、闘牛など、どこか荒々しさを感じさせる題材や、最後には愛用の猟銃で自らの命を絶った作家の激しい人生は、およそ宮田先生には似つかわしくないようにも思えます。それらは、関西学院での終わりの10年間院長としての重責を圧倒的支持のもとに無事つとめあげられた先生のご経歴や、敬虔なクリスチャンで円満そのものの外貌とにこやかで穏やかでユーモラスなお人柄から私たちが受ける印象とは、明らかに齟齬があります。あるいは、齟齬があるように見えて、傍からは計り知れない内なる *expatriation* があったのでしょうか。

宮田先生は1949年に関西学院高等部入学、1956年関西学院大学文学部英文科を卒業されました。卒業直後から1966年までの10年間は関学の高等部において教鞭をとられ、その後甲南女子大学で講師をされたのち、1968年に本学部にて講師として着任されました。1970年には助教授に、1976年には教授にられました。関西学院で過ごされた期間は実に48年、ほぼ半世紀にも及びます。

宮田先生は故東山正芳教授の下で、アメリカ文学、とくにヘミングウェイの小説を研究されました。ヘミングウェイ以外には、ジョイス・キャロル・オーツについての研究もあります。また、関西学院の創立者であるランバス先生とその一族の生涯と事業に関して、翻訳をされたり、論文を書いておられます。

教育面と行政面でのご功績は言うまでもありません。高等部での10年間には、多くの有為の人材を送り出されましたし、本学部に来られてからの30年間には、社会学部学生主任、教務副主任、大学学長付、大学学生副部長、学生部長を矢継ぎ早に歴任されました。冒頭に触れました院長職の10年間に続きます。併せて、学部キリスト教教育委員会委員、学院宗教活動委員会委員、千刈キャンプ・ディレクター、千刈キャンプ所長、千刈セミナー・ハウス館長なども歴任されています。

学外での社会的活動もまた多彩で、今風に言えば、グローバルな活躍をされました。神戸YMCA理事長、日本YMCA同盟国際協力委員会委員長、世界YMCA同盟難民・復興委員会委員などの要職を歴任されました。先生ご自身が学生時代にコミットされたボラン

ティア活動の場としてのYMCAにその後もずっと関わってこられたわけです。また、日本キリスト教主義学校同盟常任理事、アジア・キリスト教大学協会（ACUCA）会長もつとめられ、そのご功績は内外から高く評価されました。1993年には、アメリカのディラード大学から、**Distinguished Achievement Award**、1995年には、兵庫県から兵庫県功労者賞、カナダのマウント・アリソン大学から名誉法学博士号が贈られています。

宮田先生がわずかとは言え定年を待たずして関西学院大学を去られることになるうとは私どもは夢にも考えませんでした。しかし、関西学院とは創立者を同じくする聖和大学学長への就任要請に応えての退官だとあってみれば、愛惜の念は尽きないものの、本学部としては誇りに思うしかなかったのであります。比類なきご功績と長きにわたるご尽力に社会学部として感謝いたしますとともに、今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

## 関西学院と私<sup>1)</sup>

宮 田 満 雄\*

本日は私の最終講義にお忙しい中をわざわざ時間を割いてご出席下さりありがとうございます。牧 学部長ならびに対馬教務主任よりご丁寧なご挨拶とご紹介を賜わり恐縮です。実は金曜日の3時限というこの時間は私の授業の時間でありまして、したがって教室のみを変更したわけでありませぬ。学生諸君には、『金曜日の3時限が確実にあいているのは君達だけだから』と申し立てたのですが、親の心子知らずと言ったところでしょうか。私は平素は英語の授業をしていますので『講義』と言われると少し戸惑うわけでありませぬ。事務局の湯原さんから最終講義のことを言われました時も、『もういいでしょう』と申し上げたのですが、『いけません』ということでこのような運びになりました。私の専門のことを喋りましてもどうかと思いましたが『関西学院と私』ということにさせていただきます。テーマを提出しました時、事務局の松岡君から『やはり私の思っていたのと同じでした』と言われ何となくホッとしたことでした。

卒直に申しまして、昨年4月、この年度が始まりました時、これが自分の関西学院における専任教員としての最後の年度になろうとは思いませんでした。私のこれまでの人生は、自ら望み、選び、勝ち取ってきたと申しますより、いつもある成り行きによってその歩みが決められてきたように思います。偶然の重なりと言えませんが、信仰的な側面から考えますと、これが恩寵と言うものかとも思っています。唯一度、そうでない時がありましたが、それが私の人生を決定づけたとも言えると考えています。そのことは後で申し上げることとして、『関西学院と私』ということでお話したいと思えます。テーマがテーマですの

で、勢い個人的でいささかノスタルジックな話になろうかと思いますがお許しいただきたいと思えます。

### 関西学院との出会い

私が初めて関西学院に入学したのは先程ご紹介いただきましたように1949年で、高等部への入学でした。その後本学の英文科に進学し1956年に卒業しました。卒業と同時に母校高等部の教諭となり1966年まで勤め、2年間甲南女子大に移ったあと1968年に社会学部にもどってそれ以来31年勤めたこととなります。つまり私は学生時代が7年、高等部教諭として10年、大学教員として31年、合計48年間関西学院と共に歩んだ、いや、むしろその中に居たということになります。しかも一度退職したあとに出戻った人間であります。一度退職金をいただいた者が舞い戻ってくるというケースは珍しいのではないかと思います。

関西学院に来る前はどこに居たかと申しますと、大分県の佐伯という所です。私は旧朝鮮京城(現韓国ソウル)で生まれ育ちました。父があちらでYMCAの仕事をしていた関係です。終戦後父の郷里の佐伯に引揚げ、3年後に関西に出てまいりました。神戸は母方の郷里です。私共の学年は旧制中学の最後に入学した学年で、小学校の時から入学と卒業の時の学校の呼称がちがうという経験をしてきました。つまり、入学時は尋常高等小学校、卒業時は国民学校、また中学の場合は入学時は旧制中学、2年になった時に学制が変り新制中学と新制高校ということになりましたから、私の場合は旧制の大分県立佐伯中学に入学したのですが、学制改革によりこの学校が高校になりま

1) この原稿は1999年1月22日の最終講義の内容の一部加筆したものである。

\*関西学院大学名誉教授

したので、私達はその高校の付設中学ということになったわけです。公立校の場合一般的には元の中学の名称はなくなっているのですが、関西学院では学院の名称は変わりませんのでそれぞれ中学部と高等部ということになったわけですが、新制の中学部としては私達より1年下の学年が第1回生であり、したがって、私達の高等部の同級生で中学部から上って来た者は中学部では0学年と言われていたということです。『やんちゃな奴は皆0学年や』と言われていたそうです。ちなみに。先程申しました佐伯中学は現在の佐伯鶴城高校のことですが、実は以前神学部で教鞭をとっておられた小林信雄先生がこの中学で学ばれました。丁度お父様が佐伯教会の牧師をしておられた時代です。佐伯教会は関西学院と深い関係を持つ教会で、明治20年代すでに教会の形成が始まっていました。

## 入学の動機

先程申しましたように私は高校進学の年に地理的に関学の近くに引っ越すようになったわけですが、それだけが関学を選んだ理由ではなく関学が父の母校だったからです。公立の高校と関学高等部を受験し両校とも合格したのですが関学を選びました。父は1880年(明治13年)生まれですが関西学院で7年間学びました。これは当時の関学の学生としては珍しいケースでした。1898年(明治31年)に普通学部の2年に編入し、卒業後直ちに3年制の英語専修科に進学しました。2年時に中退して愛媛県の松山中学の代用教員をして学費を補給し、1904年(明治37年)に新しく設立された普通学部高等部の英文科に入学し、最終的には1907年(明治40年)に同部を卒業しました。卒業生は2名で父の他に三村直幸さんという方がおられました。この学部はこの二人を卒業させたあと消滅し、後の1912年開設の高等学部(文科・商科)につながるようになったのですが、この歴史的な2名の卒業生は関西学院の歴史の中では旧制文学部第1回生として位置づけられ、今日と同窓会名簿におきましてその項目のところに名前が掲載されていますし、昨年出ました『関西学院百年史、通史編I』の中でも言及されています。

ちなみに、この文学部1回生として名前があげられている4名の中の芥川 潤という方は、『芥川先生』として私共の間では記憶されている方で、関学の中学部や文学部で英語を教えられ、後に甲陽学院の校長をなさった方です。父はこのように長く関西学院で教育を受け当時の吉岡美国院長を敬愛しており、自分の部屋にはいつも先生の署名入りの写真が掛けられていました。普通学部での同級生にはベーツ院長の後を継がれた神崎驥一院長や、長く関学で教鞭をとられた中村賢二郎先生などがおられました。この3人はグリークラブのメンバーでもあり、グリークラブ80年史にはOld Kwanseiを初めて歌ったグリークラブのメンバーの中に父の名前も出てきます。2年上には畑 歆三先生がおられ、1年下には永井柳太郎、5年下には山田耕作といった人々がおられた時代です。畑 歆三先生は畑 道也文学部長のお父様です。父は関学を卒業した後、米国マサチューセッツ州のスプリングフィールド・カレッジに留学したのですが、この学校でバスケットボールが誕生したこともあり、1911年に帰国しました時にそのルールを持ち帰り競技スポーツとしてのバスケットボールを当時の神戸YMCAを中心に始めました。これは日本で初めてのことでした。したがって、バスケットボールを競技スポーツとして初めて日本に紹介したのは関西学院の卒業生ということになります。このことは本学の体育の先生もご存知です。

## 高等部学生時代

当時高等部の部長は河辺満麿先生でした。関西学院で学ばれ、その後米国や英国に留学され国際感覚豊かな魅力的な先生でした。戦後間もない頃で受験戦争もなく、物質的には現在のように豊かな時代ではありませんでしたがおらかな時代でした。旧制予科や専門部理工科から移られた先生方が多くそのような雰囲気も高等部内にもあり、先生方にも教授、助教授、講師といった肩書きが残り、教師会は教授会と呼ばれていました。当時の名簿を見ますと先生方の肩書きがついています。先生方も個性豊かで特長のある方が多く私共はいろいろな形で薫陶を受けました。例えば、兄

玉国之進という英語の先生がおられました。関学の卒業生で米国のデューク大学で学ばれ素晴らしい先生でした。流暢な英語を話され、また、英語の通訳をなさる時に使われる日本語がこれまた流麗な日本語で印象的でした。先生はまた運動部の学生達の面倒を本当によく見られた先生で、このことは本学の体育の教授をしておられ、アメリカンフットボールの監督も長くなされた私共の先輩であります米田 満先生が『関西学院とともに』という題のもとに立派な児玉国之進伝を出しておられます。これは児玉先生の卒寿を記念して米田さんが書かれたものです。また、松田毅一先生という歴史の先生がおられました。先生の西洋史の授業は受験のための授業といったようなものではなく、高等部の45分授業の時間一杯歴史を熱っぽく講義されるもので実に迫力のあるものでした。先生のご専門は日本におけるキリシタン史で、この分野では第一人者でした。高等部で10年間教鞭を取っておられましたが、その間毎年1冊著書を出されたというエネルギーの塊のような方でした。確か最初に出された大部な著書は『日本キリシタン史』だったと思います。上下巻で創元社から出版されたのではなかったかと思います。後に高等部を退職なさる時、自分が在職中に10冊もの著書を出版できたのは河辺部長のご理解があったからであると謝意を表明しておられました。先生は後年ルイス・フロイスの日本史の訳書を完成され菊池 寛賞を受賞されました。現在の天皇陛下が皇太子時代ご進講にあがったこともありました。とにかくご自分の学問研究の探究における情熱たるや凄い先生でした。

関西学院教育の特長はキリスト教主義に基づく全人教育、英語教育、国際感覚の涵養等々であります。私は自分で言うのもおかしいと思いますが、このような関西学院教育の薫陶をよく受けたと思います。2年上級には今日ここにきて下さっている武田 建理事長がおられました。私が1年の時3年で学生会の会長をしておられました。同級には経済学部の池田 信教授、商学部の石田三郎教授、総合政策学部の田島幹雄教授、またすでに定年退職されましたが、佐藤市郎高等部宗教主事がおられましたし、1年下には今田 寛学長、森本好則経済学部教授、そして長く社会学部で教

鞭をとられた船本弘毅現東京女子大学学長がおられました。2年下には山内一郎院長やオリックスの宮内義彦社長がおられました。この学年はよくできる人が多くいたと思います。

私は高等部在学中に多くのことを学びましたがその中の一つは英語です。英語についてはこの時代に良いオリエンテーションを受けたと思います。もっとも、九州の中学でも英語学習の基礎となるべき大切なことをみっちり教え込まれました。これは古いと言われるかもしれませんが中学1年の時に発音記号を訓練されたことです。このことにより辞書を見れば初めての単語でも正確に発音できるようになりました。単語に片仮名で発音を書きそえる必要がなくなったわけです。このことはその時代の同級生達が今でも良かったこととして話の種にするところです。高等部における英語の学習で一番良かった点は外国人の先生に和文英訳を習ったことでした。当時高等部におられた宣教師の先生のうち、ハワード・ノルマンというカナダ人の先生が和文英訳の授業を担当されました。先生のお父様も長く日本で働かれた宣教師であり、先生も弟さんのハーバート・ノルマン氏も日本生まれです。ちなみに弟さんは著名な歴史家であると同時に外交官であり、戦後駐日カナダ代表部首席となり日本アジア協会の会長も務められた方です。したがって先生はバイリンガルで和文のニュアンスの理解も日本人と同じでした。外国人の先生に和文英訳を習う利点は、訳された英文が適切なものかどうかの判断の基準が文法のみ依存していないということです。普通日本人の先生ですと先づ文法的に正しいかどうかをチェックされますが大抵の場合それが全部です。ところが外国人の先生の場合、たとえ文法上に誤りがなくても習慣的にそのように言うか言わないかということで判断されます。ですから『何故ですか』と食い下がる生徒に対して、『英語ではそう言いません』と言われるとそれでおしまい、生徒としては言われた通りを素直に覚える方が勝ちということになります。直されてぶつぶつ言う生徒もいましたが、理窟を言っている間があったら暗記した方が勝ちというわけです。そのような教え方をされたことにより英語に対するセンスが養われたと思います。私はそれ以後よく『お前はどこで

英語を習ったのか』と問われることがありますが、そのような時はいつも『関西学院で習いました』と答えていました。米国に留学しましたから私の英語も随分改善されたことは事実ですが基本的なことは関西学院で教育されたのです。このことを私は英語の教師として感謝しています。

私の高等部在学中の忘れ得ぬ体験として、これまでにチャペルなどでよく話をしてきたことですが、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ先生との出会いがあります。ヴォーリズ先生は本学と深い関係にあり、特に関西学院が神戸から現在の上ヶ原に移って来た時、キャンパスのレイアウトから建物の設計まですべてを担当された方で、神戸女学院や同志社も先生の設計です。同志社の **One Purpose Doshisha** という英語の校歌も先生の作です。キリスト教関係の建物の設計ばかりでなく多くのビジネス関係の建物も設計されています。心齋橋の大丸の建物も先生の設計です。先生は宣教師として来日され活躍されましたがメンソレタームで有名な近江兄弟社は先生が創立者です。先生のことにつきましては1993年の関学ジャーナルの『一粒の麦』というシリーズで私が文章を書いています。先生は本学では教鞭をお取りになりませんでした。が理事を務められたこともあり、私の学生時代はよく宗教運動の講師として招かれ来学しておられました。温顔で魅力的な先生でしたが、私が高等部3年の時の宗教運動の時に来学されたことがありました。現在のようにランパスチャペルがまだ無い時で早天祈祷会は図書館前の中央芝生で行われました。私は高等部の宗教部長をしていたこともありそれに出席しました。高等部の授業は今もそうですが8時20分始りで祈祷会が終るとすぐ走って行かなければなりません。私が祈祷会終了とともに走り出そうとした時、河辺部長が『宮田君一寸』と言って呼び止められ私をヴォーリズ先生に紹介して下さいました。私としては遅刻しそうで気が気でなかったのですが先生はおかまいなく『ヴォーリズ先生、これが高等部の宮田君です。』先生は握手をして下さったのですがなかなか手を放して下さいません。優しい笑みを浮かべ私の手を握ったままで『宮田さん、第一は神様のこと、第二は他の人のこと、三番目が自分のことです』と言われました。先生はよく『先

づ神の国と神の義を求めよ』ということをお話になっておられ、先生の人生もそのようなものでした。先生はよくお話の中で神様のために生きる時に自分の持っている最も良きものが生かされると言っておられました。私にはヴォーリズ先生との出会いのことが忘れられない貴重な体験となりました。

あの当時私達は本当に真剣に自分の人生のことを考え、何が自分に与えられた使命なのかといったようなことをお互い考え合いました。夏には修養会という集まりが計画され生徒と先生方が一緒になって2泊3日位の期間宿泊して人生の大切な問題を考え合ったものです。千刈のキャンプ場やセミナーハウスのような施設がまだ無かった時代です。このような中からキリスト教の信仰を持つように導かれて行った人々も少なからずありました。私は先程申しましたように宗教部長をしていましたが、同期の部員のうち8名が神学部に進みました。これ程多くの人々が一度に神学部へ進んだのは高等部の歴史の中で後にも先にもこの年(昭和27年)が初めてでした。当時の高等部の雰囲気伝える貴重な一面だと思います。

## 大学進学と就職

大学進学の時期を迎えた時、私はためらわず関西学院大学の英文科を選びました。その理由は2つ、つまり、私はつねづね英語の教師になりたいと思っていましたし、当時の本学英文科には錚々たる教授陣がそろっていたからです。当時の私のこの選択は周囲の人々からは一寸変わった選択だと思われていたようです。それは戦後間もない昭和20年代の後半、世の中もまだ安定していない時、英文科などに行ってどうやって将来食っていけるのかということとは真剣な問題でしたから。ですから高等部を卒業する者は大抵経済学部進学を希望していました。文学部など以ってのほかだったのです。

私が教員志望であったのは、自分の人生を意味あるものにするためには何をすればよいのかという問題を高等部生活の中で考えたこともあります。が、家庭環境の影響でもあったと思います。私の家族と言いますか、家系には牧師や教師は沢山の

ますがビジネスに携った人というのは非常に少ないのです。母方の叔父二人は関西学院の神学部を卒業後牧師となり、また後にはミッションスクールで教えました。そのうちの一人は関西学院中部部の部長を務めました。また、明治、大正の時代、女性が留学することはまだ珍らしかった頃米国や英国に留学した叔母や大叔母達は何人かいます。このようなことでしたが私自身の家はつましい家計の家でもあり、経済的なことには疎い環境でした。それで恥かしいことですが私はかなり大きくなるまで銀行が本当は何をする所か知りませんでした。せいぜいお金を預けておく場所位にしか考えていなかったのです。教師になることに何の打算もありませんでした。

当時の英文科の陣容は日本一と言われた程のもので、英文学には寿岳文章、米文学には志賀 勝、英語学には大塚高信という錚々たる顔触れでした。そしてこれに次いで東山正芳先生が居られ、さらに若手に滝川元男、永井 衷、北山正顕といった先生方がおられました。助手にはつい2、3年前に定年で退職された教職課程室の脇坂先生の若き姿がありました。そのあとの助手は楠井さん、つまりこの3月で定年退職される杉山洋子先生でした。

当時の英文科の授業は非常におおらかなもので、えらい先生方の講義を聞き、ノートをとり自分で勉強するといったタイプのもので、リサーチの方法論といったようなことは科目にもなっていませんでした。後年米国に留学する機会に恵まれた時、あちらでは文学研究の方法論といったようなことが進んでいるのに驚き、また戸惑ったことを思い出します。当時英文科にティール先生という方がおられ、この先生に和文英訳を通してコンポジションを習いました。先生は日本語もよくおできになる方で、テキストに岩波文庫の山本有三著『路傍の石』を選ばれました。毎週のアサインメントはこの作品の中から指定されました。『次は何頁から何頁まで』という具合です。その部分を英文に直して提出するわけです。『吾一は下駄の音を鳴らしながら路地へ駆け込んだ』といったような描写の続く箇所など本当に難かしいものでした。皆赤鉛筆で真っ赤になる位添削されました。これは良い勉強になりました。この時ティー

ル先生から私が言われたことで励まされたことは『君の作文は言葉の選び方が良い』と言われたことです。私の作文も級友達のものと様に用紙が真っ赤になる位いつも直されてはいたのですが、単語の選び方、つまり **word choice** が良いということでした。これは高等部時代にノルマン先生から和文英訳を習った時の賜物だと思っています。このことは後に私自身が英語を教えることになった時大変役に立つこととなりました。

いよいよ卒業の年を迎える前年、大学4年の時級友たちもそれぞれ就職活動を始めたと思います。が、当時は今のような就職指導などというものは学内で行われていなかったと思います。第一、就職部というものは存在していませんでした。これは後で考えて『よくやったな』と思うのですが、私は直接河辺先生を高等部長室に訪ね、『先生、僕も来年卒業ですが高等部で英語を教えさせて下さい』とお願いしました。私は自分の性格として、自分はこれができるのでこのようにして欲しい、と自分を売り込むということの出来ない男なのですが、この時は何のためらいもなく、両親にもゼミの担当の東山先生にも殆ど何の相談もしないでいきなりぶつかったわけです。今から考えると、よくあの時あんなことが出来たと思うのですが、先生は一寸びっくりされたようですが、にこやかに『宮田君、もう卒業か』と言われ、先生独特の仕種で薄い頭をつるりと一撫でして『考えとこ』と言われました。その後の手続き上のいろいろなことはあまりよく記憶していませんが結局採用されることになりました。ゼミの東山先生も驚いておられました。私は河辺先生に入っていたのだと感謝していますが、このことが私の人生の重要な契機となりました。

## 高等部教諭時代

大学卒業と同時に母校高等部の教諭として英語を教えることになりました。1956年のことでした。ここで1966年までの10年間を過すことになりました。在任中河辺満壺、加藤秀次郎、石田己代治という3人の部長に仕えることとなりました。それぞれに個性的な部長でした。高等部の殆どの先生が私の直接の恩師であり、私は最年少の教員

として後輩の指導に当たったわけです。張り切って後輩を鍛えるといった気持でした。学生時代から米国留学を夢見ていましたので勤めて3年目に内外協力会の留学生試験を受け幸いに合格しましたので1960年の7月に渡米しました。内外協力会といえますのは米国、カナダの教会が日本の教会を支援する組織でそこが毎年留学生試験を行っていました。私は1962年の2月に帰国しましたが、留学時代の経験は英語の教師としてはもとより、いろいろな面で本当に貴重なものとなりその後の私の人生に生かされることとなり感謝しています。留学先はフィラデルフィアにあるペンシルヴェニア大学でした。この学校はベンジャミン・フランクリンが1740年に創立した学校です。帰国後も引き続き高等部で教鞭をとり一生懸命でした。ですから、本学のある学部からお誘いを受けた時も感謝しつつもお断りしたようなことでした。これは学内では珍しいことだったらしく、宮田は大学に移る気はないらしいと言われていたようです。

『変った奴っちゃ』と言うことだったのでしょう。高等部教諭時代のことについてはいろいろ申し上げたいことがあるのですが、私が後に囚らずも院長を務めることになりました時、この時代の教員の子どもの存在が如何に大きな励ましになったかということ強く思い知らされることとなりました。

当時の忘れ得ぬ体験の一つを申し上げますと、高等部が正月の大阪花園での全国高校ラグビー選手権大会に兵庫県代表として出場したことです。1966年（昭和41年）1月、私が高等部を退職することとなった年の正月のことでした。当時私は高等部ラグビー部の顧問をしていました。高等部がこの大会に出場したのは高等部の歴史の中で後にも先にも今のところの時だけです。常勝報徳を破っての出場でした。決勝戦は相手のトライ1つで逆転されるという際どいスコアで高等部リードのままノーサイドの時間が迫っていました。そこで報徳がウイングまでボールをまわしインゴールに持ち込み観衆が報徳の逆転優勝を確信した瞬間、反対側から執拗に追っていたうちの選手がインゴールでタックルをし、ボールがこぼれてトライ成らず結局高等部が逃げ切ったという劇的な勝利でした。花園での本大会では大東文化学院高校と当たり完敗したのですが、これは高等部にとっ

ても、また関西学院全体にとっても快挙だったわけです。ところが、野球に比べると学内の反響もさしたることもなく、おまけに先年刊行された『高中部百年史』にも何ら言及がなく少々淋しい思いをしました。当時の選手の中で息子が現在関学のラグビー部で活躍している人もいます。最近出ました『KG Today』を見ますと、昨年高等部の野球部が春の選抜に出場した時の広告効果は25億円と書いてありました。時代が違うとは言え大変な違いで驚きます。

甲南女子大学から思いがけないお誘いがありました時、以前の時のように即座にお断りすることができませんでした。人間働き出して10年も経つといろいろなことを考えるものだった次第です。真剣に思い悩んだ末お誘いを受けることにしました。お世話になった母校を裏切るような気がして胃が痛くなるような思いでした。1966年3月末をもって関西学院を退職したわけです。

## 母校に再就職

甲南女子大に2年間勤めた後、1968年に母校に舞い戻ってくることになりました。この時関西学院大学では各学部の英語教員をそれぞれ1名増員することになったようで、社会学部の武田先生から連絡をいただきました。あれ以来今年の3年末で31年が経過したことになります。この31年のうち半分以上は何か役職についていました。Mastery for Serviceの教育を受けた卒業生のつらいところです。

母校へもどってきた1968年という年はあの学園紛争が始まった年でした。社会学部でも皆さんからどうしてこんな騒々しい所に戻ってきたのか、飛んで火に入る夏の虫、と言ってからかわれたことでした。前例のないこの大紛争に対処するために学院では教職員が本当に一致協力して動いたと思います。学内では今でも会議が多過ぎる、委員会が多過ぎるといった声も聞かれますし、忙しさの分担という点につきましても、かならずしも平等になっているとは言えませんが、何か事に対処する時の関学のワーキングスタイルは誰か特定の一人が号令を掛けるというよりも会議を重ねながら事を進めるという方式で、時間はかかりますが

結局はその方が早いということでしょうか。紛争の時も小寺学長代行の下に特別調査企画委員会、略して特調委と言われていましたが、城崎、新浜、田中国夫、田中敏弘、塩原、そのほかにも居られましたが、私よりも先輩の世代の諸先生方が委員となりいろいろな方策を打ち出され、私達の年代はその下働きとして走りまわったわけです。学内が封鎖されていたため神戸の王子陸上競技場で全学集会を開催し学内封鎖解除へ向けてのきっかけを作ったのですが、ただ『上ヶ原へ帰ろう』というだけでなく『学長代行提案』といわれる関西学院の改革に関する理念的实际的な提案書をアピールの中心に据え学生達の心を動かすことになったのです。関学独特の方式だったと思います。本当に学院はつぶれるのではないかと思わせるような騒動でしたが学生教職員が一致して学園の正常化のために努力したわけで、私はその時関西学院という学校が持っている潜在的な能力と復原力の凄いに深い感銘を受けました。

実はこの大紛争が一応の終焉を見た後1974年の秋から次の年の前半にかけて小紛争ともいえるべき時期がありました。丁度西治学長の時です。いろいろな理由から西治学長が誕生したのは1974年の6月でした。学内も一応の平静を取り戻していたこともあり、また、なるべく多くの人々の手をわずらわしたくないと思われたのか先生は学長の補佐役にあたる人々の数を最少限に抑えてスタートされましたが、秋に入り同和問題などの人権問題を中心とした運動が激化する兆候が現れたために学長府を急遽拡大されました。時期が時期でしたからなかなか人が得られなかったのでしょうか、私に声が掛かり学長付ということで学長を補佐することになりました。お断りしたかったのですが先生は私の高等部学生時代の幾何の先生でどうしてもお断りできませんでした。先生もこの繋がりを頼りにされたのだと思います。短期間に事態は急変し、先生は健康を害され翌年2月に退任され勝本理学部長が前任学部長として学長事務取扱いの役を担われました。私はこの短い期間に学長付から学生副部長になり結局同年5月に久保学長が誕生するまで塩谷教務部長、谷村副部長、それに保田学生部長と共に所謂終戦処理に当りました。大紛争の時とは違い、どちらかと言うと局地戦的で

関係部署は大変でしたが他はそれ程でもなく、何となく空しさを感じさせられる事態でした。

このあと学部において学生主任を2回、教務副主任、教務主任事務取扱いなどを歴任し、1983年12月、いよいよ翌年3月末で学生主任を解放してやるという武田学部長のお達しを受け喜んで帰宅したその夜、城崎学長から電話があり学生部長にということでした。電話でお断りするの失礼と思いつきに学長室に伺いましたところ学長代理の柘植先生も一緒に居られ結局お引き受けする羽目になりました。私はいつもこのパターンでやられていました。つまり、『お前がここで断ったら後はもう人がいない』ということです。

丁度この時期は新しい学生会館の完成が真近に迫った頃でした。このプロジェクトについては私の前任には小島達雄先生、佐々木先生がおられそれぞれ学生部長として最も困難な時期を担当されました。私はこのお二人の後を受け最終段階を担当したわけです。学生部のワーキングスタイルの中から私は多くのことを学びました。教職員スタッフが文字通り一致協力して事に当る方式は関学方式とも言うべく、私立大学連盟においても注目されており、小島先生をはじめ関学の学生部長は私立大学連盟の学生部委員会で代々委員長や副委員長といった要職についています。

1987年にはこれまた思いがけない成り行きから体育会アメリカン・フットボール部の部長を学生部長のままお引き受けすることとなり、今日に至るまで部の活躍を一喜一憂しながら見守ってきました。関学フットボール部は常勝関学という輝やかな戦績を誇っており、これを継続することが非常に困難になった今も名門の名に恥じない活躍を続けています。

神様の私に対する気まぐれもここに至って極まれりと言うべき事が1989年に起りました。この年の3月15日、公選制復活後最初の院長選挙が4分の3以上の教職員が集まる中央講堂で行われ第1回目の投票で私が第12代院長に選ばれたのです。選挙終了後すでに夕暗につつまれた中を正門の方へ帰りを急ぐ人々を避けて学校の裏手から新甲陽の方へ一人で歩いて行ったことを思い出します。理事長・院長という一つの職制を元通り理事長と院長に分離し院長を公選とすることが決められた

のがこの年の2月、選挙は3月中旬、そして2週間後の4月1日には就任という考えられないあわただしきで宮田院長が誕生し、加藤誠之理事長、拓植学長とご一緒に三人揃い踏みで就任式が行われたことでした。この年は1月に昭和が終りを告げ平成に移った年でしたが、関西学院としては創立100周年の年であり大変でした。結局私は規程に定められた最大限の3期9年を務めることとなりました。この間2期目と3期目は武田 建理事長です。学長は拓植、柚木、今田と3人の先生が交替され現在今田学長となっています。院長としての第1期目(1989-1992)の終りに大学が三田校地利用をお決めになり、第2期目(1992-1995)に新学部、総合政策学部設立の準備が進められ、第3期目(1995-1998)の初めに開設されました。

100周年の記念行事が滞りなく終了したこと、関西学院が新しい学部開設を軸にして新しい時代へ向けて進み出したこと、ブランチメモリアルチャペルが神戸市の手で復元され利用できるようになったこと等々感謝すべきことが多くありましたが、反面、日曜入試問題など、時代の流れに対応するために学院全体が心を労したことも多々ありました。何よりも大震災は大きな痛手であり命を落された人々の中に数多くの学院関係者が含まれていたことは痛恨の極みでした。しかし、何よりも感謝すべきことは関西学院の歩みがこの10年間落ち着いたを取り戻し建設的な方向へ力強く歩み出したことです。旧約聖書に『あなたがたは立ち返って落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る』とあります<sup>2)</sup>。『穏やかに信頼するならば力を得る』、“in quietness and in confidence shall be your strength”つまり、『あなた方の力は信頼の中にある』ということです。私はこの10年間にこの聖書のみ言葉は成就されたと思い感謝しています。

院長在任中私は海外を含め各地の同窓会支部総会に出席する機会を得ました。そのような時に感じた大切なことは、教育の業は『種播きの業』ということです。具体例をあげることは時間の都合もありできませんが、このことを痛感し学院の教

育は生きているという確信を得たことは感謝すべきことでした。

中学部は500名余り、高等部が約900名、大学はさらに多くのメンバーを加え関西学院総体として教育の効果をあげることを望みます。関西学院の教育の目的は『知的・宗教的教養』を身につけさせることです。日本語の学院憲法には『キリスト教の主義に基づき知徳兼備の教育を受ける』と記されていますが、私は英文で書かれた最初の文言の方が好きです。すなわち、“intellectual and religious culture”つまり、知的宗教的教養ということです。関西学院を創設したメソジスト教会の始祖ジョン・ウェスレーは、教育とは **unity of knowledge and piety** だと言っています。つまり知識と敬虔の融合です。敬虔とは神を恐れ敬う心です。

関西学院は私の中ではただ自分が卒業した学校というだけでなく、何か人格化されたものとして生きています。関西学院と私の関係は父の時代からのことを考えますと何か不思議に思えます。多くの卒業生にとってもそのような存在としてそれぞれの中に生きています。私にとって関西学院は正に **Alma Mater**、日本語では『母校』ですが、その言葉の意味するところは養いの母親ということです。関西学院は正に私を養ってくれた母親のようなものです。学生諸君も母校の良さを十分吸収して社会に出ることを願っています。母校が本当に諸君に訴えようとしていることを素通りして卒業して欲しくありません。

以上感謝を込めて私の最終講義とさせていただきます。ありがとうございました。

2) イザヤ書30:15 口語訳 1955年改訳